

「省」を考える

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

信仰を持って生きる人の特徴の一つは、自らを省みる努力とそれによって培われる更新の力にあると思います。私たちが聖餐式の中で「思いと、言葉と、行ないによって、多くの罪を犯していることを懺悔」し、神様の赦しを乞い願うのは、それをあらわす代表的な場面です。しかし、一般に言う反省や懺悔と違うのは、一緒にこの世に生きている人々（兄弟姉妹）だけでなく、「神様と天の会衆の前で」と、そこまで意識して告白するところです。周りで見ている人間だけを意識するのは、いわゆる世間の倫理や決まり、マナーに当たりませんが、私たち信仰者は、目には見えない存在とも繋がっているのです。聖書や教会の教えに基づいたクリスチャン倫理から自らを省みる信仰者は、聖パウロが教えたように「たとえ、わたしたちの外なる人は衰えていくとしても、わたしたちの内なる人は日々新たにされていきます」（コリントⅡ第4章16節）というみ言葉を生きる者です。この言葉は先日105歳の人生を全うされたエリザベツ辻恵美子さんの愛する聖句でもありました。日々の歩みに対する反省や省察を持って一日を省み、一年を省みながら、新たな一日、一年を迎えることから、私たちは神のみ旨に適う者として刷新されたもう一人の自分として成熟していくのです。

さて、私たちはこのように馴染んだ「省」の意味だけを捉えがちですが、実は「省」には元々の大事なもう一つの意味があることを忘れてはいけません。省筆や省文で見られるように、「はぶく、へらす」という意味をも持っているのです。古く中国から地方行政区画名に使われており、(河北省等)、日本では外務省、法務省など中央省庁の名称に「省」が使われています。この場合「省」には、民に仕えるべき役所の機能や役割に対する大事な意味合いが含まれています。つまり役所というところは、余計な手続きや高ぶる姿勢などを省いて、それぞれ任された分野で効率よくかつ速やかに民の声に応える事で、存在意義を示すべきなのです。それと同じように、私たちも「省」のもう一つの意味に注目すべきです。余計な論議や執着、自己流の主張や我執、無理やり省いて、神の民として生きていくため、宣教に仕えるため、イエスの歩みに従うための「省」をも意識しながら自分を省みるべきです。